

教育経済建設常任委員会行政視察報告書

中 島 真 弓

○山形県南陽市

シェルターなんようホール（南陽市文化会館）について

【所 見】

今回、平成 27 年にオープンした全国初となる大型木造耐火の文化ホール「シェルターなんようホール」を視察した。文化会館入口を入りすぐのエントランスの 6 本の木柱がとても印象的で、木の温かみを感じとても落ち着く空間であった。地元産スギ材を積極的に活用した経緯については、市の約 6 割が森林資源であり、それらを有効に使うこと、また「静けさと響き」というテーマで設計を進めたため、静けさと響きがよい音響性能の確保も決め手ということであった。さらに、株式会社シェルターが特許を取得している「クールウッド」を採用し、国内最先端の耐火木造技術や強度を両立していた。

会館の目玉となるのが、1,403 席ある大ホールである。音楽家の坂本龍一氏をはじめ、尾崎豊を育てたプロデューサーの福田信氏ら国内の名立たる人材 7 名にて構成された専門家委員会を発足させ、ホールを設計した。最新の技術と充実した設備でコンサートや演劇、伝統芸術や講演会など様々な音楽事業に対応でき、宝塚も上演できる舞台という考えのもとで設計されたため、多くのバトンや、可動式の反響板、大勢の人たちが同時にドライヤーを使える控室等にも配慮が見られた。また、資材搬入口は、トレーラーが 2 台同時に進入可能で、舞台袖に直結することも専門家委員会による「使う側」の目線によって作られたからだと考える。完成後には「最大の木造ホール」としてギネス世界記録認定され、現在も多くのアーティストの興業が実現している。さらに、車椅子席の充実に加え個室と親子席もあり、誰もが快適に利用できるよう、ユニバーサルデザインに十分に配慮されていた。講演中、子どもが泣いてしまったらどうしようという心配も軽減でき、木材の暖かみを活かしたキッズコーナーは、開館中無料開放していることも子育て世代にはとても優しく、安心して来館できる会館であると感じた。

総工費 66.5 億円のうち、32.94 億円は国の補助金などを活用しているが、人口 3.3 万人の自治体にとっては巨額の財政負担といえる。本市においても、財源に限りがある中、築 50 年になる市民会館を含めた大型の公共施設の老朽化による建てかえが課題となっている。文化の醸成に係る事業費をどのような視点でみるのか、費用対効果の検討を充分に行うことが必要であるが、このような素晴らし

いホールのようにまちの魅力を引き出す、作り出す施設がほしいと感じた。今回、文化の担い手の目線にこだわり抜いて創り上げられた南陽市文化会館の整備事業は、とても参考になった。

○山形県米沢市

P F I 制度による市営住宅建替等事業について

【所 見】

米沢市の市営住宅塩井町団地建替事業は、地域における多様な需要に応じた公的賃貸住宅等の整備等を推進することにより、市民生活の安定と豊かで住みよい地域社会の実現に寄与する目的で計画され、塩井町団地の建てかえに伴い、民間の資金とノウハウを活用した P F I 制度を導入し附帯施設を含む建替事業を実施した。建設コスト・運営コスト合計の削減は約 4 % ということで、コスト削減の効果はあまり期待できない状況であるが、公共の事業負担の軽減や住民が受けるサービスの向上のメリットがあり、高齢者対応のバリアフリーの部屋に住居している高齢者に対し、必要に応じ生活指導・相談・安否確認・緊急時の対応を行う L S A (ライフサポートアドバイザー) 従事室が集会所にあり、より安心して暮らすことができているとのことであった。

今後多くの公共施設等が老朽化による更新時期を迎える中、公的負担の抑制に資する P F I 制度が有効な事業は、本市においても十分に起こりうる。また、良好な公共サービスの実現、新たなビジネス機会の創出も期待できることから、この方法が最適な場合には採用すべき手段だと感じた。しかし、近年応募者がいない、予定価格が低く落札できない等の理由により民間業者を選定できないといったことや、使用開始後の P F I 制度に関して官民の間に不信感が発生するなどの事案が出現するなど、慎重な取組みが必要だとも感じた。